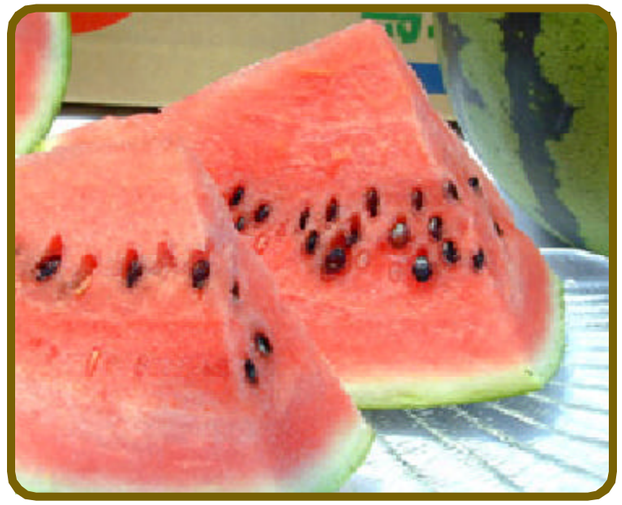
結 yui

八十八膳献穀会　会報　第拾号

小名浜の西町にあった砂地の畑で採れたすいかを、家の井戸水に浸けて冷やし、それを切り分けて家族とともに味わった日の思いが、行間ににじみ出ている事を読み取ったのは、遺骨も還らなかった父の形見として何度も何度も読み返した末のことであった。

昭和二十年三月十七日、硫黄島に立てこもった日本軍将兵は、上陸したアメリカ軍に総攻撃を仕掛けて玉砕。この夜、父は祖母ミカの夢枕に立ったという。



献穀会年間行事

四月二十六日	八十八膳献穀会　総会
五月二十四日	田打祭
五月二十八日	御田植祭
八月中旬	注連縄奉製勉強会
九月十五日	飯野八幡宮古式大祭
	八十八膳献饌神事
十月下旬	抜穂祭
十一月上旬	芋煮会
	研修旅行
十一月下旬	新嘗祭
十二月中旬	忘年会
一月上旬	農立神事
三月中旬	祈年祭

入会案内

飯野八幡宮八十八膳献穀会　会員募集

現在　奉耕会員　二十五名
　　賛助会員　五十三名
　　特別会員　八　名

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様がご入会くださるようお願い致します。

結 yui　No.10

発行日　平成十六年十月二日
発行所　八十八膳献穀会
〒九七〇―八〇二六
福島県いわき市平八幡小路八十四
飯野八幡宮　社務所内
℡〇二四六―二二―二四四四
飯野八幡宮ｗｅｂ
http://www.noteplan.net/8man/
発行責任者　飯野　光世

日本人のＤＮＡ　鮫島　和弘

外国人から見た日本人像として「まつりを気にしてなかなか自分の意見を言わない」「一人で判断できずいつも集団で行動する」等々が言われる。あるいは「願い事は神社に詣で、墓参りは寺に行き、結婚式は教会で挙げる。クリスマスやバレンタインデーはいわずもがなで、日本人の宗教観は理解できない」などと言われたりする。耳の痛い指摘であるが、その起源はどこにあるのだろうか。

ひとつには日本が農業国だからといわれている。他の古代文明と同じく農業国は多神教である。

農業は様々な自然条件がうまく融合することで初めて収穫できる。日光・風・水など多くても少なくても災害をもたらす。このため、これらを神として祀るようになった。また定住生活のため、農地や山・川・大木・大石、さらには井戸・かまど・道路・橋なども信仰の対象となった。こうした自然を対象にした信仰は限りなく多神教となり、有益なものはなんでも取り込んで崇拝するという民族性が生まれたといわれている。

今年の神饌田の稔り

さらに農業、特に米は共同作業の賜物であり、耕作する人数が多ければ収穫もあがるから、他者を受け入れることもできる。機械化される前は、米作りは村を挙げて行った。かつての「村八分」は単なる仲間はずれではなく、生きていけない、つまり死ぬことを意味していたといわれる。

そうした社会のもとでは一糸乱れぬ団体行動が理想とされ、他人と異なる考えや行動がタブーとされるようになり、こうした習性が現在まで残っていて冒頭のような日本人観につながるのではないだろうか。

これに対し、牧畜の風土に発生したキリスト教やイスラム教は、牧草や水を求めて移動するため神は一人でよく、神の姿を模した偶像は造らない。たとえ牧童でも群れを率いる以上は一人前のリーダーであり、自分で判断することが求められる。さらに生産性の限られている牧畜は、余分な人間を食わせることができないから、排他的な面も持っている。

これらはどちらが正しいということではなく、その風土から生まれた信仰や宗教は、他の民族にとって奇異に見えても歴史的な経緯があるのであり、それを理解することが双方に必要なのではないだろうか。

（いわき市文化財保護審議会委員・蘭秀寺住職）

菊酒の効用　飯野　光世

九月十五日飯野八幡宮の古式大祭が、恒の如く斉行され、ご神前に八十八膳神饌がお供えされました。関係各位の誠心に深甚なる謝意を申し上げます。

今年の祭礼は一日の祭始祭、九日の円座的祭、十三日の潮垢離神事、十四日の例祭、十五日の古式大祭とすべての神事が天候に恵まれました。近年稀なことと存じます。

天候といえば今年は猛暑と台風が顕著に現れた年でもありました。これも地球温暖化の影響でしょうか。幸い当地方は台風の被害も無く作況指数も「やや良」となっており、昨年の冷害とは打って変わって豊作のようです。御神恩に感謝申し上げる次第であります。

さて九月九日の円座的祭の直会では恒例の菊酒が振舞われました。この菊酒は重陽の節句に因んだものです。

節句はもとは「節供」と表され、神に供える「節日の供物」を意味しておりました。この「節日」はすでに奈良時代には定められており、宮廷儀礼として伝えられていましたが、江戸時代に入ると「五節供」として制定されました。「五節供」というと正月七日の「人日」、三月三日の「上巳」、五月五日の「端午」、七月七日の「七夕」、九月九日の「重陽」です。

重陽は易で陽数の極である「九」が重なることから目出度い日とされ、菊の花を飾り、丘などに登って邪気をはらい長寿を祈る風習が中国にあり、これが日本に伝わったものといわれ、日本では奈良時代より宮中で、菊の花を浮かべたお酒を酌み交わし、観菊の宴が催されました。

菊の花は食用菊とし、酢の物・あえものなどに用いられ、酒のつまにはもってこいで、二日酔いを防止する作用があるなどその効用は期待できそうです。その他の効用を調べると解熱、また、毛細血管の抵抗性を増し、さらに、抗菌性があることが知られています。菊は「効く」？など揶揄されていますが、案外不老長寿・健康保持などに関する話が昔からいろいろな書物に書かれているところから見ると、本当に効くのではないかと思います。

こんなところにも先人の知恵が見られ、大変興味深いものです。

（飯野八幡宮宮司）

西瓜（すいか）の味　小野　一雄

拝啓

炎暑の候、永らく御無沙汰に打ち過ぎました。その後、母上様初御皆には何のお変わりも無くお暮らしの事と思い居ります。麦地も八月に入りてより、日々暑い盛りと思います。母上様にも刈りに田草などにて大分御多忙だった事でしょう。今年の大麦の作はいかがでしたか。あまり無理を致さぬ様、御注意いた様お願ひ申します。

地も西瓜、南瓜の盛りでしょう。これで内地の西瓜の味も二夏はふ事も出来ませんでしたが。

た、浜の方の漁はどうですか。大謀網等の漁はいかがですか。場の方の件はいか様になりましたか。御通知下さる様。生の俸給の六月分より家族渡しに成り居ります故、六月・七月共に渡り居る事でしょうが、また四月二十二三日に電報為替に（百円也）送金いたしましたが、受取りの事と思ひ居りますがのため御一報の程を。

の後小生も出征以来益々元気旺盛、軍務に精励致し居ります、御放念の程をお願致します。

は時節柄御身体を大切に。

草々

右の手紙の宛先は「福島県石城郡小名浜町古湊　小野ミカ様」出人は「横須賀局気付　ウ二七ウ四〇二一　小野徳太郎」とあり、らに「軍事郵便」「検閲済」の印が押されている。軍事郵便とう性格上発信日などは記されていないが、受け取った月日がメされていたので、昭和十九年八月のものと知られる。差出人の野徳太郎は私の父、従って文中で母と呼びかけている小野ミカ私の祖母にあたる。ちょうど六十年前に、戦地の父が家郷に寄た一通である。

父徳太郎は、昭和十八年六月十三日の朝、家族や親戚、知人に送られて臨港小名浜駅を後にし、十五日に横須賀第一海兵団に団した。その半月後に小笠原諸島の父島に向かい、父島で十カの軍務のあと、さらに南の海上に浮かぶ硫黄島に転勤した。手は硫黄島から出されたものであった。

当時、私の家は自家の消費をまかなえる程度の田畑を耕作し、祖の業である鰹節の製造やイワシの方刺し、煮干しなどの加、鮮魚の出荷などを営んでいた。出征した父に代わって、農作や浜の漁模様に気を配る事となった祖母のミカは五十六歳でった。

父の戦地からの手紙は、現在私の手元に四十四通が残されている。内容から見てさらに幾通かの手紙が出された形跡があるが、かなかったらしい。この中で、食べ物のことに触れているのは、の一通だけである。

二十九歳の、戦地の父がしたためた便りはもとより軍事郵便、めて制約された表現のなかで、二夏も味わう事が出来なかった瓜の味を、炎暑の硫黄島で懐かしんでいる。